

市長賞

堺市立 深井中学校 三年

冽 鎌 沙 菜

「誰も悪くない犯罪」から学んだこと

「罪を犯す動機は一概に悪い理由ではない。」そう呟いたニュースキャスターの一言に目が行った。夕方、いつもと変わらない午後五時半頃、妹とテレビを見ていると、涙を浮かべる五十代くらいの男性が、法廷に立っていた。その男性は周りに対して、

「母のことが大好きでした。」

「もし生まれ変わるのであれば……」

「もう一度母の子として生まれたい。」

私は疑問に思った。どうしてこのようなことを涙を浮かべてまで語る男性が、法廷に立っているのか。いつもは法廷に立っている被告を私は冷たい目で見てしまうのだが、この男性を私はそのような目で見る事ができなかった。

詳細を調べてみると、この事件は『京都伏見介護殺人事件』という名前で世間に知られていた。内容は、生活苦に陥った男性が認知症の母親を殺害してしまうものだった。どうしてこの男性は母親を殺したのだろうか、それほど母親に対して恨みでもあったのだろうか。新たな疑問が浮かび、それに加えていまいち理解でき

なかったのも、もっと詳しく調べてみた。すると、母親に認知症の症状が現れ、男性は次第に追いつめられていくというものだった。男性は昼は工場、夜は介護という一日を何度もくり返していた。母親が徘徊して警察に保護されるということが珍しいことではなかったらしい。やがて男性は仕事を辞め、生活保護の相談もしたらしいが、全部断られたそう。そうしてこの生活を続けていくうちにお金が底をついてしまい、為す術もなくなり、最後に母親と京都を観光し、桂川で母と合意の上心中を図った、という事件だった。

この事件の全貌を知ったとき、何ともいえない感情が私を支配した。まず、この事件は加害者はいても悪い人がいないというのが正直な感想だった。この親子はもちろん、多少の非があるとはいえ、義務を全うした生活保護の職員、そしてこの事件の一連の流れを取りまいていたりした周りの人たち。人によって感じ方は違うかもしれないが、『悪い人』という存在がいないと私は思った。さらに悲しいことに、この事件の加害者である男性は八年後、自

殺してしまった。しかし、自殺した男性が自殺する際に身につけたポーチには、母と男性のへその緒が入れられており、メモには、「母と一緒に焼いてほしい。」と書かれていた。加えて、男性の財布には現金数百円しか入っておらず、会社もクビになっていたそうだ。私は、一度起こっていた出来事なのに、周りや国などが全く変わらないので、このような事件が起こってしまった、と思った。正直、この国やこの国の制度に対してふっふつと怒りが湧き出た。

今回の事件を通して、私は、決して自分とは無関係ではない、とまず思った。私ももしこのような状況になったら、親には親孝行のつもりで介護をするが、自分自身が壊れると元も子もないので、身内や市町村、介護関係の団体に相談したり、今の時代だとSNSもあるので、SNSの相談サイトなどに相談したりして、最悪の状況になることを防ぎたいと真っ先に考えた。

このようなことから私は、介護や生活保護等の仕組みを見直すべきだと思った。この事件の男性は何を思っただけで自殺したのだろうか。そう考えると普段は感じることはない悔しさがどつとあふれた。多分、周りの人たちが助けてくれたらこのような哀しい事件は起こらなかった。だから人と人との関わりを強化していくべきだとも思った。私はもし身の周りにこのような状況に陥っている人がいたら、同情だけでなく積極的に助けてあげたい。先ほども

言ったが、逆にこのような状況に私が陥ってしまったら、周りから助けてもらえる社会になってほしい。

今回の経験から私は、人と人どうしの関わりや何気ない日常の会話や出合いがとて大切であることを改めて理解した。私が大人になったら、積極的に人と関わり、些細なことでも互いに助け合い、支えあえる人間関係を築いて、人を救いたい。

